

# 新潟県納税貯蓄組合総連合会優秀賞

「税金は入る、その先の希望へ」

新発田市立 加治川中学校 3年 村山涼さん

「税金は、見えないところで生きている」そんな言葉がふと浮かんだのは、教室で教科書を開いたときだった。冷暖房の効いた教室まっすぐな机と椅子、黒板の前で話す先生。そのどれもが、私たちの学びを支える大切な存在であり、税金によって支えられている。

たとえば、私が通う学校では教科書が無償で配られている。誰もが同じスタートラインに立ち、平等に学べるのは、税金が「教育」という未来へ投資に使われているからだ。保健室の薬、掃除道具、給食の補助、校舎の修繕。私たちが気づかぬうちに使っているものに、税金は確かに「入って」いる。そしてそれは、一人ひとりの学びや安心につながっている。

けれど、税金は学校の中だけにあるのではない。私の家の前にある電柱には、夜になると自動で点くLEDの街灯がある。近所のお年寄りが「夜道を安心して歩けるようになった」と言っていた。その灯りもまた、税金が注がれた結果だ。災害時、避難所に届く毛布や水、救急車の出動、誰でも利用できる公園や図書館どれもが、私たちの命と暮らしをそっと守っている。

私はこの「税金が入る」という言葉に、二つの意味を感じる。ひとつは、仕組みにお金が投入されるという事実。もうひとつは、税金が人々の暮らしに自然と入り込み、支えとなっているという実感だ。税金は単なる「お金」ではない。そこには、誰かを支えたいという見えない思いや願いが込められている。

もちろん、税金がただ集められるだけでは意味がない。その使い道が正しく、公平で、未来につながるものでなければならない。無駄な支出や不正の報道を目にするたび、「私たちの大切なお金は、本当に役立っているのだろうか」と考える。だからこそ、「納める責任」と同時に、「見つめる責任」も私たちにはあるはずだ。社会に参加する一員として関心を持ち、声をあげることもまた、立派な納税のかたちだと思う。

私は今、税金を納める立場ではない。でもいつか働くようになつたら、誇りをもって税金を納めたい。それは、自分の払ったお金が誰かの支えになり、未来の希望につながっていると信じたいからだ。税金とは、社会を信じる心であり、他者を思いやる意志の結晶だと私は思う。

税金は「入る」。それはただの流れ込みではない。人と人をつなぎ、命を守り、希望を運ぶ力として社会を巡っていく。そしてその力は、やがて学び暮らし、笑顔となって私たちのもとへ返ってくる。

税金は時に重く感じられることもあるが、本来は皆で未来を支える「思いやりの循環」だ。私は、税金は良いことだと信じている。誰かの明日を照らす、小さな希望のかけらだから。税金を正しく知り、生かせる大人になる、それが私の目標で、未来への約束だ。